

日本語トリタテ助詞と中国語焦点副詞に関する対照言語学的研究

日语提示助词和汉语焦点 副词的对比语言学研究

■ 吴卫平 著

南开大学出版社

《日語提示動詞和漢語提示動詞的對比語言學研究》

日語提示動詞和漢語提示動詞

副詞的對比語言學研究

■ 副詞的對比語言學研究

上海人民出版社

湘潭大学博士基金项目资金（项目编号 201311001105002）

本书系湘潭大学外国语言文学湖南省十二五省级重点学科成果

日语提示助词和汉语焦点 副词的对比语言学研究

日本語トリタテ助詞と中国語焦点副詞に
関する対照言語学的研究

吴卫平 著

南开大学出版社
天 津

图书在版编目(CIP)数据

日语提示助词和汉语焦点副词的对比语言学研究 /
吴卫平著. —天津: 南开大学出版社, 2014. 6
ISBN 978-7-310-04505-1

I. ①日… II. ①吴… III. ①日语—助词—研究
②汉语—副词—研究 IV. ①H146.2②H364.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2014)第 109792 号

版权所有 侵权必究

南开大学出版社出版发行

出版人: 孙克强

地址: 天津市南开区卫津路 94 号 邮政编码: 300071

营销部电话: (022)23508339 23500755

营销部传真: (022)23508542 邮购部电话: (022)23502200

*

河北昌黎太阳红彩色印刷有限责任公司印刷

全国各地新华书店经销

*

2014 年 6 月第 1 版 2014 年 6 月第 1 次印刷

210×148 毫米 32 开本 8.375 印张 2 插页 205 千字

定价: 20.00 元

如遇图书印装质量问题, 请与本社营销部联系调换, 电话: (022)23507125

序 言

吴卫平于2004年9月在职进入广东外语外贸大学日语语言文学专业硕士课程学习,2006年硕士毕业后回到湘潭大学继续任教。2009年又考上广东外语外贸大学日语语言文学博士课程,在本人的指导下开始从事汉日对比语言学方面的研究。吴卫平进入博士课程学习后刻苦钻研精神令人惊讶,入学一年就跟导师合作在核心学术期刊上发表了研究论文。他通过个人的勤奋和努力,实现了从日本文化方向到汉日对比语言学研究领域的成功转变,并很快掌握了对比语言学的基础理论和研究方法。吴卫平很善于学习,思维敏捷,有较强的独立研究能力。他是湘潭大学日语系的骨干教师,在从事研究的同时还要承担繁重的教学工作,但是通过自己的努力,出色地完成了博士论文并顺利通过了答辩。

一般来说,语言表达中都存在一个信息焦点,它的位置是不固定的,主要取决于说话人要强调的内容。这种信息焦点可以通过各种语言手段,如语音、词汇和语法等来实现,日语的「トリタテ助詞」和汉语的“焦点副词”都是表示信息焦点的语法手段。吴卫平的博士论文以日语的「トリタテ助詞」和汉语的“焦点副词”作为研究对象,采用认知语言学和语义学的理论,对两种语言中语义对应的五组词语进行了系统的研究。论文的研究对象因语义对应的关系并未包括全部同类词语,但是论文所建立起来的理论体系为汉日两种语言信息焦点表达的对比研究提供了有效的方法,对同类研究具有积极的指导意义。

日语的「トリタテ助詞」的概念最初由日本学者宫田幸一提

出,后由沼田善子将其系统化,但是这类词在语法上仍然属于分类尚不明确的语言形式。本书的研究有助于为其明确分类提供理论依据,并且为进一步研究其他相关的语言形式提供参考。书中还运用系统功能语言学中的“焦点”和“背景”的理论重新解释了沼田善子的“自者—他者”的概念。此外,本书作者还从主观化的角度进行了考察,分析了两者语义指向的不同。

吴卫平的论著即将付梓,我为之感到欣慰和喜悦。我希望年轻一代的学者能够不断成长,推动我国的学术研究水平,特别是汉日对比语言学研究水平不断提高,尽快承担起重任,后继有人。

澳门大学日本研究中心主任、教授、博士生导师

陈访泽

2014年元旦翌日于澳门氹仔

前言

现代日语“提示助词（トリタテ助詞）”的研究，自沼田善子（1986）以来成为一大热点。在传统的国语学中被称为“系助词”和“副助词”的“提示助词（トリタテ助詞）”，例如表示“主题”的「は」或者表添加的「も」以及表示“极限”的「さえ」常被分作“系助词”，而表示“排他”的「ばかり、だけ、しか」，以及表示“界限”的「まで」常被分作“副助词”。但是这种分类法很不清晰，因为这两大语群中都包含有和其它助词在性质上有很大差别的词，因此就有将之总括为“提示词”或者“提示助词”的研究倾向。提示助词可以将句中的某成分进行强调，因而产生一种“提示”的功能。笔者认为由沼田善子（1986）提出的“自者—他者”这一概念就是一般语言学中的“焦点—背景”。而在中文里像“也”“才”“只”“净”“都”等焦点副词也具有提示句中的焦点的功能。“焦点”研究主要集中于欧美语言，而且大多数是从句法学、语义学的角度进行研究。因此，本书从语义学和功能学的角度出发，对于汉日语当中同样具有提示焦点功能的“提示助词”和“焦点副词”进行对比，考察两者的异同。

本文从对比语言学的角度出发，对日语的“提示助词”和中文的具有“提示”功能的“焦点副词”，具体为日语的「こそ」和中文的“才”、「も」和“也”、「だけ、しか」和“只”、「さえ」和“都”、「ばかり」和“净”这五组为中心，在探讨先行研究的基础上，从语义学的角度考察其对应情况。本研究并不局限于简单的意义对比，从泽田治美（2011）的语义学的“同心

圆理论”出发，从“语气”“主观化”“语法化”等角度也进行了对比。然后从“焦点”理论出发对比两者之间存在何种“焦点辖域”。

全书由 8 章组成，下面进行简单概述。

第 1 章序论阐述本研究的研究背景和研究对象以及研究目的和构成。

第 2 章对“焦点”这一概念在语言学中的研究进行阐述，同时将所关联的“背景”“焦点辖域”等概念进行说明，并对泽田治美 (2011) 的语义学的“同心圆理论”以及“语气”“主观化”“语法化”等概念进行阐述。

第 3 章首先对关于「こそ」和“才”的先行研究进行梳理，将「こそ」分为“特立的「こそ」”“让步的「こそ」”“词汇化的「こそ」”，从意义上和“才”进行对比考察。然后从语气关联的角度探讨两者的异同。最后从“焦点辖域”比较两者存在的类型。

第 4 章首先对关于「も」和“也”的先行研究进行整理，将「も」分为「も₁」「も₂」「も₃」，和中文的“也”从意义上的对应出发进行考察。然后从语气关联的角度进行对比。最后从“焦点辖域”比较两者的异同。

第 5 章首先对关于「だけ」和「しか」以及中文的“只”的先行研究进行整理，然后将「だけ」和「しか」的意义分为“提示名词性成分”或者“提示数量成分”“提示动作状态”，和中文的“只”进行对应考察。然后考察在“条件句”或者“否定句”的语法环境下「だけ」「しか」和“只”的异同。最后从“焦点辖域”和“主观化”比较两者的异同。

第 6 章将「さえ」和中文的“都”进行对比，在整理先行研究的基础上，将「さえ」分为“意外用法的「さえ」”和“最低

条件的「さえ」”，和“都”进行意义上的对比。然后从“焦点辖域”和“主观化”的角度对两者进行比较研究。

第7章对「ばかり」和中文的“净”的先行研究进行梳理，然后从“限定的方式”“复数性”和“主观性评价”的角度出发，和中文的“净”从意义上进行对应考察。然后从“焦点辖域”和“语法化”的角度比较两者的异同。

第8章对全书进行总括，同时阐述本研究未阐明的问题以及今后的研究方向。

まえがき

現代日本語研究において、「トリタテ助詞」と呼ばれる語群に関する研究は、沼田善子（1986）から始まって、盛んに行われてきた。国語学で伝統的に係助詞と副助詞と呼ばれてきたもの、いわゆる主題の「ハ」、添加の「モ」、極限を表す「サエ」は係助詞に、排他を表す「バカリ、ダケ、シカ」、限界を表す「マデ」は副助詞に分類されるのがふつうである。しかし、この分類基準は必ずしも明確ではないし、それぞれのグループには他とは性質が大きく異なるものも含まれている。そのため、それを一括して「トリタテ詞」あるいは「トリタテ助詞」と呼ぶ傾向も見られる。そして、その名の通り、文中のある構成要素を取り立てる、すなわち、他と対照的に提示する機能がある。沼田善子（1986）ではトリタテ助詞に関して、「自者—他者」というものを提起した。それが一般言語学理論の「焦点—背景」というものと看做すと思われる。一方、中国語の“也”“才”“只”“净”“都”のような焦点副詞（focus adverb）は文中の焦点と関係付けられる働きを有する。焦点に関する研究は欧米の言語でなされているものが中心で、構文論的、意味論的なアプローチからなされることが多い。それに対して、本書は意味論的、機能論的なアプローチから日本語と中国語が共通に文中の焦点と関係付けられる働きを有するもの、トリタテ助詞と中国語の焦点副詞について、どのような共通点と相違点をもっているかを考察する。

本書は、対照言語学の視点から、日本語のトリタテ助詞と中国語の焦点副詞について、具体的に日本語の「こそ」と中国語の“才”、“も”と中国語の“也”、“ダケ”“シカ”と“只”、“サエ”と“都”、“バカリ”と“净”などの五組を中心に、意味論的な観点と統語的な観点から、まず、これまでの先行研究を再検討し、意味の観点からそれぞれの用法について対応する。また、澤田治美（2011）は提起される「同心円理論」で、「モダリティ」「主観化」「文法化」のレベルから考察する。さらに「スコープ」の観点から両者について比較する。

本書は全部で8章から構成される。ここでその内容について概略しておく。

第1章「序論」では、本研究の背景とそこでの位置づけ、本研究の目的、研究対象や構成などを述べる。

第2章では本研究に関連する「焦点」を取り上げ、言語学的にどのような研究が進んでいるかを述べ、それと関連する「背景」「スコープ」などの概念を説明する。さらに澤田治美（2011）の意味論の「同心円理論」を述べる上、「モダリティ」や「主観化」「文法化」などを記述する。

第3章ではまず、先行研究を述べたうえ、「こそ」の用法について「特立の『こそ』」「譲歩の『こそ』」「語彙化した『こそ』」にわけて、中国語の“才”と意味的に対応するかどうかを検討する。「こそ」と“才”はともにモダリティを表すことができるが、どんな異同があるか、さらに「主観化」の観点から考察する。最後に統語的な観点である「スコープ」の視点から両者の異同を比較する。

第4章では、「も」と中国語の副詞の“也”について先行研究を述べた後、意味的な観点から「も」を「も₁」と「も₂」と「も₃」にわけて、中国語の“也”と対応するかどうかを考察

し、それから「モダリティとの関連」や「主観化」で両者の異同について考察する。それから「焦点」理論の「スコープ」を道具として両者の異同を比較する。

第5章ではまず、「だけ」と「しか」の意味用法や中国語の“只”の先行研究を述べたうえ、「名詞的な成分」や「数量表現」「動作状態」にわけて、それらを取りたてる場合、中国語の焦点副詞“只”と意味的にどう対応するかを考察する。また、条件文と否定文の統語的な条件のもと、トリタテ助詞「だけ」と「しか」の意味用法や中国語の焦点副詞の“只”との異同について考察する。最後に「スコープ」と「主観化」の観点から両者の異同について検討する。

第6章ではまず、意味論的な観点から、「さえ」を「意外の『さえ』」と「最低条件の『さえ』」にわけて、中国語の焦点副詞の“都”との対応状況について考察し、それから「スコープ」と「主観化」の視点から両者の異同について対照研究する。

第7章では、「ばかり」と中国語の副詞の“净”の先行研究を述べたうえ、意味的な観点から「限定の仕方」「複数性」「主観的な評価」の視点から両者の異同について考察する。また、「ばかり」と“净”のスコープについてどのような種類があるか比較してみる。最後に文法化の観点から両者の異同について考察してみる。

第8章では、本研究の結論をし、最後に本研究で扱われなかった問題を今後の課題としてあげ、結びとする。

目 次

第1章 序論	1
1.1 研究の背景	1
1.1.1 本研究の位置づけ	1
1.1.2 研究対象	6
1.2 本研究の方法	12
1.3 本研究の構成	13
第2章 本研究の理論基盤	16
2.1 焦点	16
2.1.1 焦点の定義	16
2.1.2 焦点の分類	19
2.1.3 「トリタテ」の「焦点」の性質	24
2.1.4 焦点構造 (focus structure)	26
2.2 スコープ	27
2.2.1 スコープの定義	27
2.2.2 スコープの種類	28
2.3 意味論の同心円理論 (澤田治美 2011)	31
2.3.1 モダリティ	34
2.3.2 主観化	35
2.3.3 文法化	42

第3章 トリタテ助詞「こそ」と中国語の焦點副詞

“才”の対照研究	43
3.1 先行研究	43
3.1.1 「こそ」の意味について	43
3.1.2 “才”の意味について	46
3.1.3 「こそ」と“才”の対応について	47
3.1.4 先行研究における問題点と本章の課題	48
3.2 「こそ」と“才”の意味的特徴の対応について	49
3.2.1 特立の用法	49
3.2.2 譲歩の用法	58
3.2.3 語彙化した「こそ」	61
3.3 「こそ」文と“才”文のモダリティの用法の対応	62
3.3.1 「こそ」文の場合	63
3.3.2 “才”文の場合	64
3.3.3 「こそ」と“才”の対応	65
3.4 主観化からみる「こそ」と“才”	70
3.4.1 「こそ」の場合	70
3.4.2 “才”の場合	71
3.5 焦点の諸相	74
3.5.1 スコープの種類	74
3.5.2 作用域と多義性	77
3.6 結論	78

第4章 トリタテ助詞「も」と中国語の焦點副詞

“也”の対照研究	80
4.1 先行研究	81
4.1.1 日本語における「も」の意味について	81
4.1.2 中国語における“也”の意味について	84

4.1.3 「も」と“也”の対照研究	85
4.1.4 先行研究のまとめおよび本稿の立場	87
4.2 「も」と“也”の対応	87
4.2.1 基本的な意味の対応	87
4.2.2 テ節の「も」による「トリタテ」と“也”の 対応	92
4.3 モダリティの「も」と“也”の対応について	96
4.3.1 「も ₂ 」について	96
4.3.2 数量表現の後に付ける「も」の用法	100
4.3.3 「も ₃ 」の用法	111
4.4 主観化からみる「も」と“也”	120
4.4.1 「も」の場合	120
4.4.2 “也”の場合	124
4.5 焦点の諸相	125
4.5.1 スコープの種類	125
4.5.2 作用域と多義性	127
4.6 結論	129

第5章 トリタテ助詞「だけ」「しか～ない」と中国語の

焦点副詞“只”の対照研究	130
5.1 先行研究	132
5.1.1 「だけ」と「しか～ない」の違いについて	132
5.1.2 “只”の意味の先行研究について	135
5.1.3 「だけ」「しか～ない」と“只”との対応 について	136
5.2 「だけ」「しか～ない」と“只”の対応関係	138
5.2.1 名詞的な成分に対する限定	138
5.2.2 動作状態に対する限定	141

5.2.3 数量表現に対する限定	144
5.2.4 条件文の場合	146
5.2.5 否定文の場合	147
5.3 「だけ」「しか～ない」と“只”の主観化について	150
5.4 スコープの種類	156
5.5 結論	158

第6章 トリタテ助詞「さえ」と中国語の焦点副詞

“都”についての対照研究	160
6.1 先行研究	161
6.1.1 「さえ」の意味について	161
6.1.2 “都”の意味について	166
6.1.3 「さえ」と“都”の対照研究	168
6.2 「さえ」と“都”の対応について	169
6.2.1 「意外」の「さえ」と“都”について	170
6.2.2 「最低条件」の「さえ」と“都”について	177
6.3 「さえ」と“都”の主観化についての比較	180
6.4 「さえ」と“都”のスコープについて	186
6.5 結論	188

第7章 トリタテ助詞「ばかり」と中国語の焦点副詞

“净”の対照研究	190
7.1 先行研究	191
7.1.1 「ばかり」の意味の先行研究について	191
7.1.2 “净”の意味の先行研究について	193
7.1.3 「ばかり」と“净”の対応について	194
7.2 「ばかり」と“净”の意味対応について	195
7.2.1 「ばかり」と“净”の限定する仕方	195
7.2.2 「ばかり」と“净”の「複数性」の本質	199

7.2.3 「ばかり」と“浄”の主観的評価	207
7.3 文法化の対照研究	211
7.4 「ばかり」と“浄”のスコープについて	215
7.5 結論	217
第8章 終章	219
8.1 結論	219
8.2 今後の課題	220
参考文献	225
謝 辞	246